

序

杉橋隆夫先生には、二〇一二年三月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年の功績を称え、深い感謝の意を表するため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

杉橋先生は、京都大学大学院文学研究科国史学専攻博士課程を一九七四年に単位取得退学され、京都大学助手を経て、一九七七年に本学文学部日本史学専攻の助教授として就任されました。一九八九年には教授に昇任され、合わせて三十五年という長い期間を本学の教育・研究・行政に力を尽くしてこられました。この間、数度にわたる日本史学専攻の主任をはじめ、文学部学生主事、文学部主事、文学部長（学校法人立命館理事・評議員）、文学研究科長という要職を歴任され、学部・大学・大学院の発展に寄与されてきました。とくに文学部長時代には、二一世紀の人文学を見通された大改革に着手され、今日の文学部の学際化・国際化への路を切り開く重要な基礎を築かれました。

一方、先生は、日本史研究会、日本古文書学会、史学研究会、さらには立命館史学会など多くの学会でご活躍され、ご専門の日本中世前期（十～十四世紀）の政治史研究で数多くのめざましい成果を挙げておられます。とりわけ、鎌倉幕府成立史の研究や『兵範記』の基礎的研究の分野においては、学界からも第一人者として評価されてきました。先生のご業績については、本論集の「執筆編年目録」に詳しくいので繰り返しません。古文書を精査し厳密な史料批判に基づいた作風も特筆すべきことだと思えます。

さらに、先生は、その教育・研究を通して優秀な研究者・教育者などを沢山お育てになりました。次の時代の日本中世史研究を担う人材が、先生の教えを受け、広く活躍しています。

杉橋先生は、いつも周囲に気を配られる方として知られています。未だ学園紛争の余塵のさめやらぬ立命館大学に赴任され、何かと心

遣いせざるをえなかったことが関係していると推察しておりますが、その心配りにはいつも頭が下がる思いでした。杉橋先生の心遣いに接し、心温まる思いをされた方々は数多くいらっしゃるのではないかと思います。また、源平争乱から鎌倉時代の古事に大変お詳しい先生は、さまざまな場面で、よくそれらの古事を引用されながらお話しをされました。それによって、堅苦しい雰囲気が和んだことが何度もありました。さらに、先生は東国の鎌倉武士の雰囲気に影響されたのか、曲がったことが大嫌いな剛毅の人としても知られています。少しでも不合理なことをストレートに批判される先生の教授会などのご発言は、今も強い印象を残しております。

私事ではありますが、わたくしも先生と同じ専攻に属する後輩として、先生には何度も助けられました。専攻・学部業務の多くも先生から直接ご教示・伝授されたといっても過言ではありません。こうした意味からも、文学部の学域・専攻制への移行という二〇一二年度からの大きな改革を目前にして、先生がご定年を迎えられることは残念でなりません。文学部教授会は、永年のご貢献に謝意を表するため、来る四月一日付で先生に名誉教授の称号をお贈りするよう、手続きを進めています。また幸いにも、先生には、来年度以降も特別任用教授として講義を担当いただくことが決定しています。今後とも、わたくしども後進を見守り、文学部や日本史研究学域へのご助言をいただければ幸いです。

二〇一二年一月十日

立命館大学人文学会会長

文学部長 桂 島 宣 弘